HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農村と都市の創造的関係の構築に対する観光の機能に関する研究 ： ワインツーリズムを事例として［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	八反田, 元子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第12289号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61548
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Motoko_Hattanda_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：八反田　元子

学位論文題名

農村と都市の創造的関係の構築に対する観光の機能に関する研究
～ワインツーリズムを事例として～

本論文は日本の 4 つの地域、すなわち、北海道池田町、宮崎県都農町、山梨県甲州市、および北海道空知南部で実践されているワインツーリズムに関する観光社会学的研究である。ワインツーリズムとは、醸造用ブドウ栽培地やワイナリーなどの関連施設への訪問を主目的とした観光であり、日本で注目されるようになったのはごく最近と言ってよい、新しい様態のツーリズムである。

本論文の主眼は、ワイナリー経営者や調査地域の行政関係者へのインタビュー調査、およびワイナリー訪問者やワインへの関心が高い都市居住者に対するアンケート調査を実践し、ワイン生産地域におけるワインを用いた地域活性化や消費者との関係についての考えや施策、およびワインツーリズムに参加する観光者の行動や意識、さらに都市居住者のワイン消費やワインツーリズムについての考えを分析することによって、特に観光という、人と人との出会いや交流を媒介し助長する可能性をもった社会的慣習を通して、ワインの生産者と消費者との間に、単なる経済的な関係にとどまらない、これまでにはあまり見られなかったような社会的関係―「創造的関係」―が築かれていることを実証的に示すことにある。高度成長期を含めた大量生産・大量消費の経済社会体制のもとでは一般的に、農村で土と向き合いながら生業にいそしむ者と、近代的都市環境のもとで個人化された生活を送る者の間には、農産物を生産・供給する側と、それを求め消費する側として、相互に役割が固定され社会的に乖離した状況にあり、その両者にはモノや金銭のやり取り以外の関係や交流が見られることはあまり多くなかった。日本においては今後ますます農村での人口減少が進み、なかにはコミュニティを維持することが困難になる地域が出てくるかも知れないという問題が確かな現実味を帯びつつあるが、そうした危機的な状況を打開するためにも、農村と都市の間に社会的・文化的交流を創出し、いかにして農村社会を維持していくのかという深刻化する問題を都市の側も共有しそれに真剣に向き合っていかなければならない。本論文では、こうした問題の所在を背景として、同じ地域でも谷を隔てて斜面が異なれば風味に違いが出てくる場合もあるというほど土地との結び付きが強く、栽培地の景観をはじめとした多様な観光誘因を伴い、生産者の意図が反映されやすい作物を原料とし、洗練された醸造技術をはじめとした付加価値の高い製品であるワインを媒介として、農を基盤とした生産者であるホストと、農産品に誘われて生産地を訪れるゲストとの間に、単なる娯楽追求のための余暇活動に過ぎないといった一般的な観光行動が陥りがちな範疇を超えるようにして、他者との交流を通しての新たな価値の創出をもたらすとともに、農業生産活動が潜在させている社会的・文化的な意味の理解にもつながるような「創

造的関係」が構築され、ひいては上述のような社会的課題の解決に至る契機が認められるということが論証されている。

研究の主要な枠組みとして用いられているのは観光社会学のアプローチであり、訪問を受け入れるワイン醸造者とワイナリー等を訪う観光者の間に、単なる生産者と消費者という位置づけにとどまらない、互恵的な社会関係が成立しているという視点を基盤としている。それと同時に、地域政策学や文化経済学のアプローチや研究成果も援用しながら、ホスト・ゲストという個人的な関係に限定されない、よりマクロなパースペクティブも併用し、ワインツーリズムによって農村と都市との間の社会的力学に変化が生じ、もって農業が有する社会的・文化的意味が再構築されるという論点をもカバーしている。

研究方法に関しては、(1)関連先行文献の調査、(2) 4 つの国内ワイン生産地域への現地調査、および、(3)ワインツーリズム参加者やワインに関心を持つ都市居住者へのアンケート調査を採用している。文献調査については、(1)国勢調査結果、世界農林業センサス、事例対象地の自治体統計資料などを通して、研究の背景となる社会的課題を明らかにした上で、(2)農村と都市との関係性、ツーリズムの社会的機能、ルーラルツーリズムやワインツーリズムの考察といったテーマに関わるものを中心として、観光社会学関連の文献を参照し、また、(3)事例対象地の先行研究を確認することを意図して、4 地域の市史や町史、統計資料、関連書籍や報道資料等を調査した。次に、現地調査は 2010 年 9 月から 2014 年 5 月までの間に、ワイナリー視察とインタビュー、行政担当者インタビュー、セミナー参加などを目的として、延べ 31 日間で 37 回にわたって実施した。最後に、アンケート調査に関しては、質問紙調査とインターネット調査の二つの方法によった。前者については、2013 年 10 月から 11 月、および 2014 年 6 月から 11 月の 2 回、空知地域のワイナリー等への来訪者を対象として、現地で手渡した調査紙に記入後郵送してもらう方式で実施し、のべ 145 の回答サンプルを得た。後者に関しては、ワインに関心のある都市居住者を対象として、市場調査会社に登録された、札幌市および東京都在住の 10568 人のモニターに対する予備調査を経て、ワインツーリズムに参加した、あるいはそれに関心のある者に絞り込んで、1024 名を対象に本調査を実施した。

本論文は、こうした文献調査や実地調査で得られた結果やデータに対して、観光社会学的あるいは文化経済学的分析を加えて論証を進めた上で、ワインツーリズムを通した都市と農村との交流拡大およびその社会的・文化的意義について、最終的な考察を展開していく。自然災害の影響、流通のグローバル化、産業廃棄物処理施設への転換の可能性といった外的要因に促された側面はあるが、4 地域の農業者はそれぞれ、「創造性とポリシーをもって自立する農業」を志向しつつ消費者と直接向き合うような関係の再構築を模索している。他方で、発展過程にあるワインツーリズムを通して、都市の消費者はブドウという農産品やワインというその加工品に、必ずしも有利ではない場合もある、土壌条件をはじめとした多様な栽培環境に適応しながら生産者が込めた「ものづくりの哲学」を読み解こうとしている事実が描き出される。本論文は、こうした生産と消費の双方向からの働きかけや行動によって、単なる「モノ＝コモデティ」としてのレベルにとどまらない、文化的価値をも伴った生産と消費が当該農村地域では実現し、ひいてはそこに人と人との間の相互理解を基盤としたネットワークが形成されるとともに、地域のプライドを喚起するような新たな文化が創発され、そうしたあり方が農村地域の活性化の一助となる可能性を論じて結びとしている。